

各界からの追悼文と報道記事

● ジュディ・タギワロ(フェイスブック)

2022年9月3日

ネリア・サンチョを偲んで

1951年8月30日—2022年9月1日

ネリア・サンチョは、セクシュアリティや性的指向の問題、そしてそれらと女性や人民の運動の前進との関係について私に教えてくれた。1986年には、彼女はすでに性的指向にもとづく差別をなくすために闘っていた。彼女はまた、フィリピンにおける慰安婦問題の提起にも尽力した。1991年か1992年に韓国に行ったとき、彼女は韓国人慰安婦と会った。女性たちは、第二次世界大戦中に拉致された韓国人女性が日本兵に性的サービスを強制された、いわゆる慰安所が組織的に設置されていたことを語った。フィリピンに戻ったネリアはラジオのインタビューを受け、韓国人慰安婦の話をし、同じような経験をしたフィリピン人女性に名乗り出てほしいと呼びかけた。ロラ・ロサ・ヘンソンはネリアの話聞き、第二次世界大戦中に日本帝国陸軍の性奴隷となった多くのフィリピン人女性の最初の一人としてカミングアウトした。国内であれ国際的な舞台であれ、私的な場であれ公的な場であれ、ネリアは常に女性の権利は人権であると主張し、女性とその子どもたちへのサービス、立法への働きかけ、教育、研究、組織化、集団行動を通じて、これらが前進するように努めた。

ネリア、安らかな旅を！

● リサ・マサ (フェイスブック)

2022年9月2日

ネリア・サンチョ、安らかに。ネリアは女性運動の象徴であり、旗手だった。彼女は「改革、誠実さ、平等、リーダーシップ、行動のための女性団結総会」(GABRIELA)の共同設立者の一人だった。彼女は1986年に私をガブリエラに勧誘し、それ以来、私たちは女性解放のための闘いに参加することで友情を深めてきた。彼女は同志であり、メンターでもあった。彼女は1986年に第一回「フィリピンにおける女性国際連帯行事」(WISAP)を開催し、マルコス独裁政権の追放をフィリピンの女性たちとともに喜び、祝う世界中の女性たちを集めた。彼女は既成概念にとらわれることなく、ガブリエラのサービス・プログラムの概念化と組織化を主導し、後に人権、女性の健康と生殖に関する権利、女性と子どもに対する暴力、女性のための社会環境プログラムに関するガブリエラ委員会へと拡大した。これらのプログラムは、農村および都市コミュニティの女性たちとの実践的な活動を通じて、女性運動構築の概念を発展させ、半植民地・半封建社会の文脈における女性解放

闘争の理論化に役立った。ガブリエラの以前から、ネリアはすでに反マルコス独裁闘争で著名だった。70年代初頭、彼女はルソン島中部で発生した大洪水の被災者支援に積極的に取り組み、オペラシオン・トゥロンに参加した。軍によって仲間の活動家が殺害されるのを目の当たりにし、不正と抑圧と闘うという大義に対する彼女の決意はさらに深まった。その後、彼女は逮捕され、政治的拘束者の窮状に注意を喚起するため、他の政治的拘束者たちとともにハンガーストライキを行った。ネリアはまた、政治犯や活動家の子どもたちにデイケアを提供する PAI (ペアレンツ・オルタナティブ・インコーポレイテッド) の設立を支援した。ネリアは慰安婦問題の先駆的かつ確固たる提唱者であり、日本のフィリピン占領中に日本兵が犯したレイプや軍事的性奴隷制度などの残虐行為を、フィリピン国民の意識に知らしめた。1987年、ネリアは進歩的政党である人民党の上院議員候補に唯一の女性として立候補した。ネリアは、フィリピンのトップモデルの一人であり、後にビューティー・クイーンになるという華やかな職業から身を引き、人々に奉仕する人生を選んだ。穏やかでありながら確固たる信念を持ち、社会解放のための困難な闘いの道を歩んできた。家族や友人たちとの日常生活の中で、彼女は政治的な原則を貫いた。彼女は私たちの闘う心の中で永遠に女王であり続けるだろう。

● ガブリエラの声明

2022年9月3日

ガブリエラ全国女性同盟は、創立メンバーの一人であり、フィリピン女性運動の象徴的存在であった敬愛するネリア・サンチョ・リャオの逝去を、深い悲しみとともにお知らせします。ネリアはまた、高く評価された愛国者であり、民主主義、社会正義、民族主権を求める人民運動のリーダーでありました。

ネリア・サンチョは、ガブリエラの設立に計り知れない貢献をしました。ガブリエラは今日、原則にもとづく団結と集団行動がいかにかに社会に大きな変化をもたらし、女性が社会的、政治的、経済的権利と利益のために闘う力を与えることができるかを示す輝かしい模範となっています。

彼女はビューティー・クイーンでしたが、後に女性の身体の商品化と性的搾取を拒否し、粘り強い提言活動によって国際的な女性運動においても傑出した人物になりました。

ネリアは、同世代の多くの青年活動家と同様に、勇気を持って地下に潜り、アメリカが支援するマルコス独裁政権と闘いました。ネリアは逮捕され、ついには軍によって投獄され拷問を受けました。

このように彼女は最後まで反ファシストであり続け、2022年5月の選挙では、マラカナンへのマルコスの復帰に反対するキャンペーンを彼女なりのやり方で行いました。

彼女は断固とした反帝国主義者であり、米国や他の西側諸国による小国や弱小国への侵略に反対する他民族の大義を支持しました。そこから彼女は、キューバに対するフィリピンの連帯グループである「アミスタッド」や同様の団体の議長を務めました。

彼女は1990年にBAYAN (新民族主義者同盟) の議長を務めました。彼女はまた、フ

フィリピンの愛国的運動の他の著名な指導者と共に、人民党の下で上院議員選挙に立候補しました。

彼女はまた、ガブリエラの事務局長として、フィリピンの子どもたちの権利と福祉、貧しい女性のための社会経済・地域健康プログラム、女性の人権の促進に対応するプログラムと組織化を主導しました。彼女は、貧しい女性たちの日々の苦闘に寄り添い、共に分かち合うリーダーの模範でした。

ネリアの非常に重要な貢献のひとつは、フィリピンにおける「慰安婦」運動の確立でした。これが、彼女が健康上の理由から引退し、よりプライベートな生活を送るようになる前の、ガブリエラとの最後の関わりとなりました。ネリアは1992年にフィリピン人「慰安婦」に関するタスクフォースを発足させ、その後1994年にはリラ・ピリピーナを立ち上げました。以来、リラ・ピリピーナは日本軍による戦時性奴隷制度の被害者の声を直接届けてきました。ネリアは被害者たちとともに、法廷闘争で、議場で、街頭で、正義を求め、侵略戦争や占領戦争、軍隊による女性に対する性的暴力の停止を求めて闘ってきました。

亡くなる前、ネリアはリラ・ピリピーナの歴史文書の作成に協力し、パンデミックの前には、リラ・ピリピーナと、後にパナイ島で設立された第二のフィリピン人「慰安婦」のグループであるロラス・カンパネラの統合の促進にも尽力してきました。

彼女は回顧録を執筆する予定でしたが、健康を害したため実現しなかったようです。

私たちの姉、ネリアがいなくなるのは寂しいことです。安らかに眠ってください！

彼女は本日、本人の希望通り、近親者のみで火葬されます。通夜とガブリエラによる追悼式の詳細については後日お伝えします。

連絡先：

エミー・デ・ジーザス

シャロン・カブサオ・シルバ

● ブラットラット

<https://www.bulatlat.com/2022/09/06/tributes-highlight-beauty-of-nelia-sancho/>

ネリア・サンチョの美しさを際立たせる追悼の言葉

2022年9月6日

ミカエラ・サントス、ジャネス・アン・J・エラオ

Bulatlat.com

[マニラ] 先週亡くなったビューティー・クイーンで、女性の権利の活動家である故ネリア・サンチョへの追悼が続いている。

「ネリア・サンチョはガブリエラの設立に計り知れないほどの貢献をしました。ガブリ

エラは今日、原則にもとづく団結と集団行動がいかに社会に大きな変化をもたらし、女性が社会文化的、政治的、経済的権利と利益のために闘う力を与えることができるかを示す輝かしい模範となっています」。ガブリエラは声明のなかでそのように述べている。

1971年、サンチョはオーストラリアのメルボルンで開催されたコンテストでクイーン・オブ・ザ・パシフィックに選ばれた。フェルディナンド・マルコス・シニアの独裁政権下、提言団体ダキラによる2016年の女性月間の賛辞で述べられているように、彼女は「国の有意義な変化を追求して」、進歩的運動、そして後には地下運動に積極的に参加した。

戒厳令下の1976年から1978年にかけて、彼女は他の活動家と共に逮捕され、拘留された。その際、彼女は軍から拷問を受けた、とガブリエラは述べている。

サンチョはその後、1987年の上院議員選挙に際して、新しい政治を提唱するため、労働運動指導者の故クリスピン・ベルトラン、報道の自由の闘士ホセ・ブルゴス・ジュニア、人権弁護士のリメオ・カプロンらとともに、人民党の旗の下に立候補した。

彼女はまた、1990年に新民族主義者同盟（BAYAN）の議長を務めた。

アジア女性人権評議会は、「疎外された人々への共感、鋭い知性、穏やかだが確固たる交渉力によって、ネリアは偉大な人権擁護者となった」と追悼の意を表している。

活動家、母親となったビューティー・クイーン

サンチョは以前、アジア・ジャーナルUSAとのインタビューで、当初はフィリピン大学で医学部進学課程を履修していたが、後にマスコミュニケーションに専攻を変えた、と語っている。

1969年、彼女はビニニン・ピリピナスのコンテストに参加し、準優勝した。その後、フィリピンのトップ・ファッションデザイナーの一人であるビトイ・モレノのモデルを務め、後にフィリピン観光省からクイーン・オブ・パシフィックのコンテストのフィリピン代表に任命された。

任期を終えた後、彼女は学生運動、とくに米国のベトナム戦争への関与に抗議する活動に参加するようになった。彼女はまた、後に地下運動に参加することになる同級生たちを支援した。

しかし1973年、かつての同級生たちが逮捕され、サンチョの名前を含む寄付者や支援者のリストも一緒に押収された。そのため、彼女たちも身を隠すことを余儀なくされた。

転機は2人の大学教授が殺害されるのを目撃したことだったと、彼女はアジア・ジャーナルUSAのインタビューで語っている。

「私の良心は落ち着きませんでした。軍隊にとっても腹が立ちました。最終的に私は地下活動に参加することに決めました。実際のところ、私は地下組織を探さなければなりませんでした。その逆ではありません。彼らから私を探したり、リクルートしたわけではありません」と彼女は語っている。

後悔はあるかと尋ねられたとき、まったくないと彼女は言った。「なぜなら、それはその時の私の良心にもとづく決断だったからです」。

「機会があればもう一度やるかどうかですか？ まあ、私にはすでに経験がありますが、

おそらく別の経験を試すかもしれません」とサンチョはインタビューで語っている。

BAYAN はその追悼声明で、組織にとって「重要な年月」であったとする 1990 年から 1994 年にかけて議長を務めたサンチョに最高の敬意を表した。「彼女は、加盟する各階層団体とともに、BAYAN に不和の種をまこうとするあらゆる試みを失敗させるために、原則的で、鋭く、たゆまぬ努力を示した。彼女は、闘争を継続させようとする私たちの努力を結びつける光となった」。

彼らもまた、常にスケジュールや活動でいっぱいになっている彼女の携帯カレンダーを覚えている。縁周りを含め、すべてのスペースが彼女のメモで埋め尽くされていた。

BAYAN はまた、サンチョの人生、そして周縁化された人々に寄り添ってきた彼女の闘いを理解し支えてくれたサンチョの家族にも感謝している。

一方、フェイスブックの投稿で、サンチョの娘であるアンナ・ルーズは、母親を新しいことに挑戦することを恐れず、とても生き生きとした人だったと語っている。「一番の思い出は、あなたが子どもの頃に私に本を読んでくれたことです。」

アンナ・ルーズは付け加えて、息子を妊娠していたとき、母親が息子を抱っこして「毎朝外に出て、彼に必要な朝日を浴びせていました。アヴァはあなたに知恵をもらい、あなたをいつも楽しませてくれたと思うわ」と書いている。

フィリピン人慰安婦のチャンピオン

ガブリエラは、フィリピンの女性運動へのサンチョの重要な貢献のひとつは、フィリピン人慰安婦の権利と賠償の推進を提唱したことだと述べている。

元社会福祉長官で女性の権利の活動家であるジュディ・タギワロはある投稿によれば、サンチョは 1990 年代初頭に韓国を訪れ、第二次世界大戦中に日本兵に性的サービスを提供するために拉致された韓国人慰安婦に会った。「フィリピンに戻ったネリアはラジオのインタビューを受け、韓国人慰安婦の話をし、同じような経験をしたフィリピン人女性に名乗り出てほしいと呼びかけた」。

それを受け、ロラ・ロサ・ヘンソンは、日本の占領下での経験を共有するためにフィリピン人慰安婦として初めて名乗り出た。

1992 年、彼女はフィリピン人慰安婦に関するタスクフォースを発足させ、2 年後にはリラ・ピリピーナを立ち上げた。リラ・ピリピーナは、フィリピンでの日本軍による戦時性奴隷制度のサバイバーの声を代弁してきた。彼女はまた、フィリピン人慰安婦の窮状を記録した「ロラス・カンパネラ」を率いてきた。

「ネリアは被害者たちとともに、法廷闘争で、議場で、街頭で、正義を求め、侵略戦争や占領戦争、軍隊による女性に対する性的暴力の停止を求めて闘ってきました」とガブリエラの声明は述べている。

女性運動のインスピレーション

一方、先住民族の権利に関する元国連特別報告者のヴィッキー・タウリ・コープスは、

サンチョはフィリピンでの女性運動の重要な役割を担ってきたと述べました。

ガブリエラの声明は、創設メンバーの1人で元事務局長であったサンチョは、「フィリピンの子どもたちの権利と福祉、貧しい女性のための社会経済・地域健康プログラム、女性の人権の促進に対応するプログラムと組織化を主導してきました」と述べている。

「彼女は、貧しい女性たちの日々の苦闘に寄り添い、共に分かち合うリーダーの模範でした」とガブリエラは付け加えている。

ガブリエラ女性党のアーリーン・ブロサス議員は、サンチョは亡くなったが、彼女は「この国において人道危機の悪化と闘い続ける何世代もの女性たちを鼓舞し続けるだろう」と語っている。

ダバオ市の医師で、ガブリエラ南ミンダナオ支部の議長ジャン・リンドは、追悼文のなかで次のように述べている。「私は非凡な人間に向けては握った拳を振ります。さようなら、そして、ありがとう、ネリア・サンチョ。私は悲しみのなかにはいますが、あなたの中に目的を見出し、それは生きています」。(RTS、DAA) (<https://www.bulatlat.org>)

● フィリピン・デイリー・インクワイア

<https://newsinfo.inquirer.net/1657738/nelia-sancho-beauty-queen-womens-rights-activist-71>

ネリア・サンチョ、ビューティー・クイーン、女性の権利活動家。71歳

ガブリエル・パビコ・ラル @GabrielLaluINQUIRER.net

2022年9月2日午後10時13分



写真はフェイスブックから

〔フィリピン・マニラ〕 女性の権利の活動家で元ビューティー・クイーンのネリア・サンチョが71歳で亡くなった。彼女の家族とガブリエラ女性党のメンバーが金曜日に確認した。

フェイスブックの公開投稿で、娘のアンナ・ルイズ・サンチョ・リャオは、最後まで活動を追求し、ガブリエラの共同創設者の一人となった元ビューティー・クイーンの死を確認した。

「ナナイ、私はあなたのことをこうして覚えておくわ。今を楽しみ、新しいことに挑戦することを恐れず、とても生き生きとしていた」と、アンナ・ルイズは海を楽しむ母の写真を掲載した投稿のなかでそう述べている。

「あなたはいつも私の母であり、私の支えであり、私の力です。私の批評家であり、チアリーダー。私の子どもたちエヴァとTJのお気に入りのおばあちゃん、姪のクロエとフィオナ、甥のウェイン・トニー・スコットの最高のおばあちゃん。あなたがいなくなって寂しいです」と彼女は付け加えた。

別の声明で、ガブリエラ女性党は、サンチョの遺族に哀悼の意を表し、女性の権利擁護者であるサンチョは、女性は単なる従順な個人ではないことを示したと指摘した。

「ガブリエラ女性党は、確固たる人権擁護者であり、女性の権利を擁護した勇敢なガブリエラ・シランにちなんで名付けられた組織であるガブリエラの共同創設者の一人であるネリア・サンチョの家族に哀悼の意を表する」と同党は述べている。

「彼女は、女性は従順で従属的な存在ではなく、真の自由と人権を推進する上で重要な役割を果たしていることを証明した」と声明は付け加えている。

サンチョは、前大統領フェルディナンド・マルコス・シニアの戒厳令下で活動家になった二人の元ビューティー・クイーンの一人である。もう一人はガブリエラと連携していたマイタ・ゴメスだった。

サンチョは1969年にビニビニング・ピリピナスに出場し、2位になった。その後、1971年にオーストラリアで開催されたミス・コンテストで、クイーン・オブ・ザ・パシフィックに選ばれた。

ゴメスと同様、サンチョもファッション・デザイナーで国民的アーティストのホセ・「ポトイ」・モレノの人気モデルだった。

「1971年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を獲得したにもかかわらず、ネリア・サンチョは快適で特権的な生活を捨て、第1四半期の嵐が始まると活動家になり、最終的に戒厳令下で地下運動に参加し、政治犯になった」とガブリエラ女性党は述べている。

「その後、彼女は同じくビューティー・クイーンから活動家に転身したマイタ・ゴメスと共に、女性の権利団体ガブリエラ全国女性同盟を共に設立した。彼女は女性のエンパワーメントを積極的に提唱し、第二次世界大戦のフィリピン人慰安婦への正当な賠償を求める運動家の一人となった」。

ガブリエラ女性党によると、サンチョの人生は、女性の権利のために闘いたいと願う人々にインスピレーションを与えるだろう。「亡くなったにもかかわらず、ネリア・サンチョの人生は、この国の悪化する人道危機と闘い続ける何世代もの女性たちを鼓舞し続けるだろう」とこの団体は指摘している。

● フィリピン・デイリー・インクワイア

<https://newsinfo.inquirer.net/1658083/from-pageant-to-picket-nelia-sancho-71?fbclid=IwAR0B19YsG7UhfLeMDGWo2Z1zH3ds9ZGZWORo01ibHPNbJOATsk3NMU8xmlA#Echobox=1662243242>

コンテストからピケットへ：ネリア・サンチョ、71 歳

デンプシー・レイエス @dempseyreyesINQPhilippine Daily Inquirer

2022 年 9 月 4 日 05:34 AM



ネリア・サンチョ（写真はインクワイア紙）

〔フィリピン・マニラ〕 彼女はしばしば「ビューティー・クイーンから活動家に転身した」と評され、長年にわたり同国のアンダーグラウンド左翼に関与してきたことで、タイム誌から「ゲリラ・クイーン」と呼ばれたこともあった。

1971 年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を得たネリア サンチョは後年、期待を裏切り続け、一時は北朝鮮とフィリピンとの友好協会の会長になり、上院議員と同じ社交界で社交ダンスをし、フェミニストの友人たちを大いに失望させつつ売春の合法化を推進した。

彼女の非正統的な選択について人々がどのように考えたとしても、9月1日に71歳で亡くなったサンチョが豊かで目的のある人生を送っていたことには誰もが同意するだろう。彼女は土曜日に非公開で火葬に付され、今日の午後1時から通夜が始まると、娘のアンナ・ルイーズは自身のフェイスブックに投稿した。

「(ネリアは)自分がやっていること、やってきたことに満足していた」。サンチョと1967年のミス・フィリピン・ワールドのマルガリータ・「マイタ」・ゴメスが1984年に共同で設立した女性の権利団体ガブリエラの元パーティー・リスト代表で、戒厳令時代に地下活動をしたこともあるリサ・マサはそう語っている。

8人兄妹の5番目であるサンチョは、政府監査官としての仕事で全国を回る父親についていながら、何不自由ない生活を送っていた。医学生時代、自分があまりにも不器用なことに気付き(1999年のサンデー・インクワイアラー誌(SIM)のインタビューで彼女は、「動物の解剖をするたびに吐いていました」と語っている)、フィリピン大学(UP)のジャーナリズム学科に転向した。

大義に引き寄せられて

彼女は、1969年のビニビンダ・ピリピナスのコンテストでグロリア・ディアスと共にピンキー・モンティノーラに次いで2位になった後、「冒険として、自分が何になれるかを探求する楽しい方法として」、すぐに他のビューティー・コンテストに参加するようになった。オーストラリアでのクイーン・オブ・ザ・パシフィックのコンテストにフィリピン代表として出場した彼女は優勝し、あわせて「最もフォトジェニックな女性」賞を受賞した。

一年後の1972年、サンチョは仲間のビューティー・クイーン、ジェマ・クルーズ・アラネタとゴメスと共に、同じコンテストに対してピケを行った。「私たちは女の子たちではなく、コンテストだけを非難したのです」と彼女は言い、「(汚い老人たちが)いつもわいせつな提案をしていました」と付け加えた。

1972年の中部ルソンでの大洪水の際に救援活動を手伝ったことで、サンチョは集会や他の活動家たちとの会合に参加し、彼らの民族主義的大義にできる限りの寄付をするようになった。しかし、そのような会議のひとつで軍がマラボンを急襲したことが彼女の人生を変えた。「彼らはロスバニョスから来た二人のフィリピン大学の教授を狙っていたのです」と彼女は回想する。彼女は兵士たちが二人を至近距離で撃ったことに衝撃を受けた。サンチョは地下に潜ることを決意した。

彼女がミンダナオの地下活動のネットワークのなかで夫のアントニオ・リャオと出会い、アントニオ・カルロ(AK)とアンナ・ルイーズの二人の子どもをもうけた。しかし、結婚は長続きしなかった。「私たちは逮捕され、別々に勾留されたため、一緒に暮らすことはほとんどありませんでした」と、サンチョはSIMのインタビューで語っている。

地下活動に参加してから一年後、彼女は逮捕された。「前かがみになり、ダスターコートを着て化粧をせずに歩き回っていたのですが、認識されていたのでしょうか」と彼女は語った。サンチョは1976年から1978年まで勾留された。

NGO 活動

マルコスが1986年に逃亡した後、サンチョは1987年に人民党の下で出馬したが、落選した。彼女は最終的には戦闘的連合組織を去ることになる。「人は街頭集会だけでなく、さまざまなレベルから、さまざまな創造的な方法で、社会を変えることができるのです」と彼女は言う。

実際、サンチョは自分自身で行動し、いくつかの非政府組織（NGO）に参加した。その中には、慰安婦への正当な賠償を提唱するアジア女性人権評議会がある。「政治闘争の人間的な表情を見て、それを（自分の）個人的な生活に置き換える」ことは、政治的拘束者の子どもたちのためのコミュニティ・デイケアであるペアレンツ・オルタナティブ・インコーポレイテッドを設立することを意味した。それは彼女の「支援システム」としての役割も果たしたと彼女は言う。

ガブリエラを共同で設立したことは彼女の中のフェミニストに「触れた」とサンチョは付け加える。「慰安婦や売春婦が、被害者から力を得た女性へと変貌を遂げたことも、私の成長とエンパワーメントに貢献しました」と彼女はSIMに語っている。

セクシュアリティにひるまずに

サンチョは従軍慰安婦（戦争中に日本兵によって性奴隷として徴兵された少女たち）の大義を取り上げ、リラ・ピリピーナとロラス・カンパネラを設立し、この問題を世間に知らしめた。個人が政治的なものであることを再び証明した彼女は、ア克蘭州カティ克蘭にある彼女の家族の家に慰安婦の像を設置することを許可した。その像が日本政府からの抗議を受けて、何度か公共の場から撤去されていたからだ。

論争を恐れず、サンチョはかつて売春の合法化を主張し、売春の非犯罪化と「これらの女性たちを犯罪者にし、一日おきに警察の手入れと恐喝にさらしている」浮浪禁止法の廃止を主張した。

サンチョは、セクシュアリティや性的指向の問題について議論する際にひるむことはなかった、と戒厳令のサバイバーである元社会福祉長官のジュディ・タギワロは言う。「1986年には、彼女はすでに性的指向にもとづく差別をなくすために闘っていた」とタギワロは述べる。「国内であれ国際的な舞台であれ、私的な場であれ公的な場であれ、ネリアは常に女性の権利は人権であると主張し、女性とその子どもたちへのサービス、立法への働きかけ、教育、研究、組織化、集団行動を通じて、これらが前進するように努めた」と彼女は付け加えた。

「ロラ・ネリア」

同僚や仲間の活動家は、サンチョを民衆の権利のために闘う大胆不敵な戦士と見なしているが、彼女の家族は愛する母親、愛情深い祖母、寛大な義母を失うことになる、と彼女

の娘は明かした。

「彼女は周りの人々の目には、勇気づけられ、英雄的でさえあります。娘や姪たちに、ロラ・ネリアについて素晴らしいことを話すことができます」。アンナ・ルーズは、オンラインメッセージでインクワイアラーにそう語っている。

母親にそっくりな声で、彼女は次のように付け加えました。「女性の権利と貧しい人々のための闘いは始まって久しいですが、まだ終わってはいません。弱者を食い物にする抑圧者は常に存在するのです」。

アンナ・ルーズは次のように語る。「私の希望はサンチョのような女性たちがもっと出てきて、より大きなものの一部になることです。誰かが立ち上がり、私たちが有能で強いのだということを思い出させてくれる必要が私たちにはあります。私たちは攻撃されても押し返すことができます。コミュニティ、社会、政府の助けを借りて、私たちは自分自身を守ることができるのです」。

出典：「女戦士」、ペニー・アザルコン・デラ・クルス、Sunday Inquirer Magazine、1999年3月28日

● ページェント・スローバック・フィリピン

Pageant Throwback Philippines

2019年4月11日

ネリア サンチョは、デザイナーのピトイ・モレノのモデルで、1969年のビニビング・ピリピナスのコンテストでグロリア・ディアスと共に次点となり、1971年のクイーン・オブ・ザ・パシフィックでタイトルを獲得し、「最もフォトジェニックな女性」賞を受賞しました。

ネリアは鋭いナショナリズムと若者の理想主義によって第1四半期の嵐が始まると活動に加わり、最終的には戒厳令下の地下運動に参加しました。その後、彼女は政治犯となり、80年代初頭にビューティー・クイーンから活動家となった仲間のマイタ・ゴメスとともに女性グループ・ガブリエラを共同で設立しました。

エドサ革命の後、彼女は1987年に上院議員に立候補して落選しましたが、女性のエンパワーメント、ナショナリズムの発展、および第二次世界大戦時のフィリピン人慰安婦への正当な賠償を提唱するいくつかの進歩的な組織への関与を続けています。

彼女は美貌のビューティー・クイーンというだけでなく、私たちの社会の、疎外され、しばしば無視されている不利な立場の人々に奉仕するという真の目的意識を持っています。

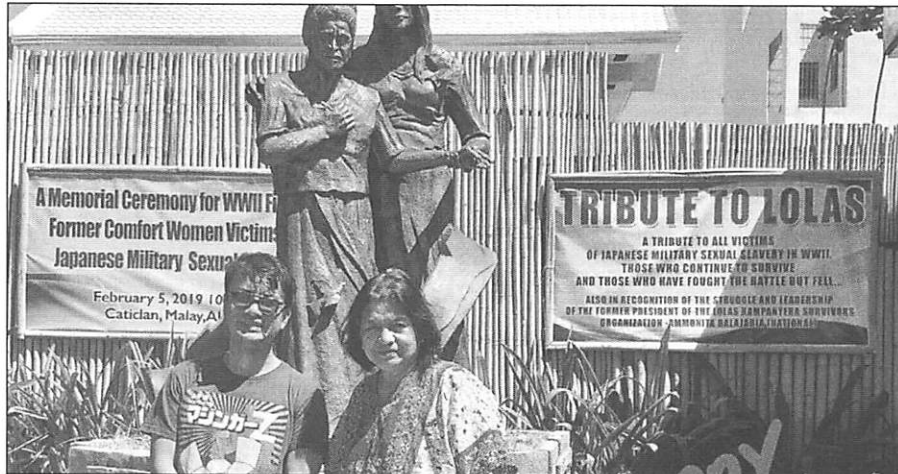
● ミンダ・ニュース

<https://www.mindanews.com/top-stories/2022/09/nelia-sancho-beauty-queen-activist-passes-away/>

ビューティー・クイーンで活動家のネリア・サンチョが死去

2022年9月2日 14:49

アントニオ・L・コリーナ IV



アクラン州カティックランにあるロサ・ヘンソン像の前に立つネリア・サンチョ（右）。ヘンソンは、第2次世界大戦中の日本兵から受けた辛い体験を公にしたフィリピン人慰安婦の一人である。写真はデニス・ゴレチョのフェイスブック・ページより。

[ダバオ・シティ (ミンダ・ニュース/9月2日)] ビューティー・クイーンから活動家に転身したネリア・サンチョの訃報が金曜日に伝えられ、多くの追悼が寄せられている。

ガブリエラ女性党のジャン・リンド博士によれば、木曜日の午前10時ごろ、1971年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を獲得したサンチョは、ケソン・シティのUPブリス・ハウスで死亡しているのを発見された。

リンドによれば、母親の死を彼らに知らせたのはサンチョの息子であるアントニオ・カルロであった。サンチョは71歳だった。

リンドは、サンチョが「草の根レベルで民衆とともに闘った」女王として、女性運動と弱い立場にあるコミュニティのエンパワーメントに大きく貢献したことに感謝している。

「あなたは単なる太平洋の女王ではありませんでした。あなたは企業が定義するようなフェミニストではありませんでした」と彼女は述べる。

サンチョの提言は非難されたが、世界中の人々がサンチョの平和と正義のための活動を称賛してきたと、リンドは付け加えた。

「私は非凡な人間に向けて握った拳を振り上げます。さようなら、そして、ありがとう、ネリア・サンチョ。私は悲しみのなかにはいますが、あなたの中に目的を見出し、それは生きています」と彼女は語っている。

1969年、フィリピン大学在学中、サンチョはビニビング・ピリピナスに出場し、フィリピンで初めてミス・ユニバースに輝いたグロリア・ディアスに次いで第二位となった。

その2年後、フィリピン観光局は彼女をオーストラリアのメルボルンで開催されるクイーン・オブ・ザ・パシフィックのフィリピン代表に任命した。彼女はその称号を獲得し、

「最もフォトジェニックな女性」賞を受賞した。ページェント・スローバック・フィリピンのフェイスブック・ページによれば、彼女はピトイ・モレノの人気モデルでもあった。

サンチョは学生活動家になり、その後戒厳令が布告されてからは、地下活動に参加した。彼女はカガヤン・デ・オロ市での家宅捜索中に逮捕され、1976年から1978年まで2年以上投獄された。

1984年末、サンチョはカガヤン・デ・オロ市に戻り、進歩的グループのリーダーたちがミンダナオ全域でのウェルガン・バヤン（ゼネスト）の計画を議論していた会議の中で、その経験を振り返っている。



ミス・コンテストに抗議するネリア・サンチョ（右）。
リサ・マサのフェイスブック・ページの写真から。

彼女は同じくビューティー・クイーンから活動家に転身したマイタ・ゴメスと共にガブリエラ全国女性同盟を設立した。

この組織の名前は、革命家ディエゴ・シランの妻で同様に英雄であるガブリエラ・シランにちなんで名付けられた。

1990年代、サンチョは教会指導者たちによって1974年に結成された先駆的な人権団体であるフィリピン被拘禁者タスクフォースの理事に選出された。

ガブリエラ女性党はその声明の中で、サンチョの遺族に哀悼の意を表している。

「1971年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を獲得したにもかかわらず、ネリア・サンチョは快適で特権的な生活を捨て、第1四半期の嵐が始まると活動家になり、最終的に戒厳令下で地下運動に参加し、政治犯になった」とその声明は述べている。

第1四半期の嵐とは、フェルディナンド・E・マルコス大統領が戒厳令を敷く数か月前の、大規模な学生の抗議活動があった時期のことだ。

サンチョは女性のエンパワーメントを積極的に提唱し、第二次世界大戦中のフィリピン人慰安婦への正当な賠償を求めてきた、とガブリエラ女性党の声明は述べている。

「彼女は、女性は従順で従属的な存在ではなく、真の自由と人権を推進する上で重要な役割を果たしていることを証明した」。

ガブリエラ女性党は、サンチョの人生は、「この国で悪化する人道危機」と闘い続ける

何世代もの女性たちを鼓舞し続けるだろう」と付け加えている。

受賞作家のドン・パグサラは、「第1四半期の嵐の参加者で、政治的拘束者であり、第二次世界大戦中の日本による残虐行為の被害を受けた女性たちの正義を求める運動の指導者であり、北朝鮮の民衆との連帯の擁護者であった」サンチョの訃報に接し、悲しんでいると述べている。「ネリア同志、敬意を込めて追悼します」。

作家で歴史家のマカリウ・ティウは、サンチョを「真の自由の闘士」と呼んだ。

「美しさ、知能、フィリピンの民衆への真の愛。最も美しい魂、フィリピン民衆のヒーローだった」とティウは付け加えている。

ソーシャルメディアにも、悲しみとサンチョに対する称賛の声が殺到している。

サンチョは、同じく戒厳令中に拘束され、マルコス追放後の1986年に釈放された活動家、故アントニオ・リャオと結婚した。しかし、彼らの結婚は長続きしなかった。

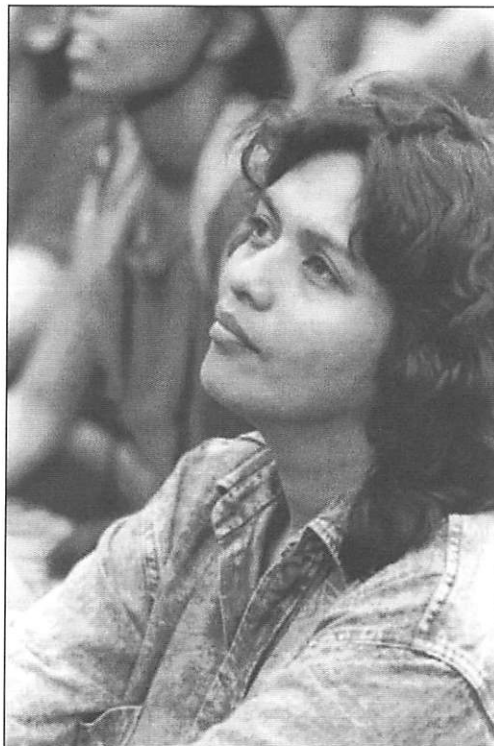
● ダイアリスト

<https://www.thediarist.ph/nelia-sancho-the-beauty-queen-who-didnt-choose-the-path-of-glamor-privilege/>

ネリア・サンチョ：華やかさ、特権の道を選ばなかったビューティー・クイーン

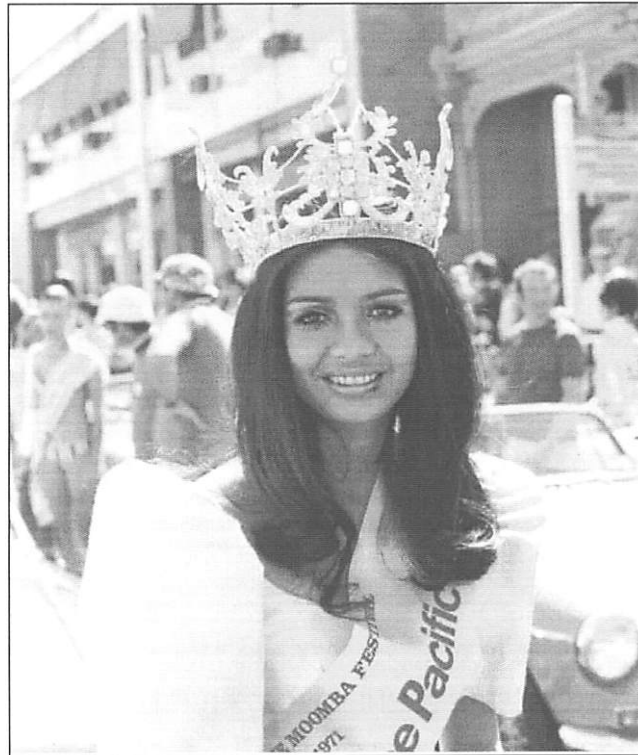
2022年9月15日

エリザベス・ローラーガ



ネリア・サンチョは大衆行動のなかで目的をもって生きた（写真：ロメオ・マリアーノ）。

9月にはネリア・サンチョ死去のニュースで始まった。このニュースが二重に衝撃的だったのは、彼女がさる9月1日に、オペラのヒロインのように吐いた血を喉に詰ませながら孤独死したことを知ったからだ。

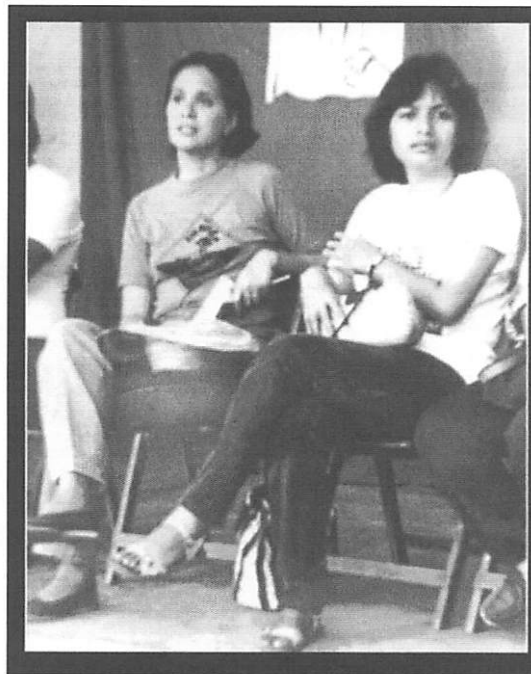


クイーン・オブ・ザ・パシフィック（写真はフェイスブックより）

ソーシャルメディア、とくにフェイスブック上では、彼女がもっと健康に気を配っていたらという悲しみと後悔の声が溢れていた。しかし、彼女はいったい何者なのだろうか？ 彼女を知る人、とりわけ社会変革運動に取り組む人々は、マルコス独裁反対運動の時期の地下活動を行い、タギッグ州のビクタン・リハビリテーション・センターに政治犯として収容されて以来、かつてクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を得たこの女性の健康状態が思わしくなかったことを知っていた。

彼女は肺結核を患い、その後、頻繁なインスリン注射を必要とする深刻な糖尿病を発症した。しかし、彼女の突然の死を惜しむ人々は、これらはすべて医学的に対処可能なものだったと言う。彼女がその声と顔を提供してきた左翼には、ある意味で彼女を無視し、彼女に付き添う介護者もいなかったという悲しい状況の中での彼女の死について部分的な責任があるという意見も出されている。

ネリア・サンチョとは何者であり、なぜフェミニストたちは公然と彼女を追悼するのだろうか。精一杯生き、目的に向かって邁進した人生を通して、彼女はどんな教訓を残したのだろうか？



マイタ・ゴメスと（写真はフェイスブックより）

ニューヨーク在住の小説家でエッセイストのニノチカ・ロスカは、「ネリアは戒厳令以前から有名で、私は彼女の政治的な変遷を知っていたし、戒厳令下でのビューティー・クイーン部隊やマラボンでの彼女の逮捕についても知っていた」と述べている。

その後、ネリアは1980年代初頭に代表団とともに米国に行った。彼女と（ジャーナリストの）ジョアン・マグリポンは、ニノチカが受け入れることになった。「ある日、ネリアから高級レストランでのディナーデートに付き合ってもらいたいと頼まれた。私は、彼女に付き添いがいるとホストが怒るかもしれないと言ってみた。彼女は、見た目のいい男と二人きりで食事をしているところを見られたくないのと言った。『見た目がいい？ それなら、あなたはここにいて。私が彼と食事に行くわ』と私が言うと、ネリアはふくれっ面をした。ジョアンは笑ったが、ネリアは明らかにニューヨークの冗談に慣れていないようだった」。

1986年、マルコス一族が追放される前、ニノチカは『ミス・マガジン』の取材で、彼女にインタビューするよう頼まれた。二人は日時を決めたが、ネリアはこの記者を2時間も待たせた。「でも彼女はとても丁寧に謝るから、誰も怒ることができない」。ネリアは「私がフェミニズムに正式に足を踏み入れるきっかけをつくってくれた。1988年に彼女に誘われ、一年かけて勉強しました。ある意味、彼女は私を別の道に導いてくれたのです」とニノチカは述べる。

ガブリエラの名誉議長、シスター・メアリージョン・マナンザンは、ネリアがミス・フィリピン・コンテストで2位、クイーン・オブ・ザ・パシフィックで1位となったビューティー・クイーンであったことから、ネリアのことはすでに耳にしていたという。「しかし、私が彼女に個人的に会ったのは、彼女がガブリエラに加入したときです。私は当時議長で、彼女は1986年のリディ・ナクピルを継いで、事務局長になりました」。

シスター・メアリージョンとネリアは、「貧しい人々や周縁化された人々の側に立つと

いう私たちの取り組みに心から同意しました。ネリアは枠にとらわれずに考えることができる人です。私や多くのフェミニストが彼女に同意しなかった問題のひとつは、売春を合法化し、売春する女性を合法的なセックスワーカーとして受け入れようとする彼女の努力でした。私は彼女がどこから来たのか知っていました。彼女はそうした女性たちに対する本当の思いやりがありました。彼女はそれが彼女たちに地位を与えると確信していました。当時、これは西洋のフェミニストの考え方でした」。

シスター・メアリージョンは、第三世界の女性たちは貧困と抑圧のために真の選択肢を持っておらず、売春する女性たちを「被害者であることを超越し、サバイバーそして提言者となるように力を与えたい被害者」とみなしていた。

彼女は、ジェマ・クルス（後のアラネタ）、マイタ・ゴメス、ネリアのようなビューティー・クイーンが戦闘的な女性運動の最前線にいることを素晴らしいと感じた。このベネディクト会の修道女は、「それは女性運動の『宣伝』のようなものでした。後に美人コンテストによる商品化や物体化に気付くとき、彼女たち自身が美人コンテストをボイコットするようになったことには、さらに大喜びしました」。

コミュニティ・オブ・ラーナーズ・ファンデーション（COLF）のエグゼクティブ・ディレクターであるフェニー・デ・ロス・アンヘレスは、1979年にネリアと出会った。「ネルは27歳で、当時幼児だった息子のAKと親としての道を歩み始めていた。彼女は刑務所から出所したばかりで、独り立ちしたばかりだった。20歳の私は、フィリピン大学家庭生活・子ども発達学科（FLCD）の新卒者として、教員としてのキャリアをスタートさせていた。ネルは当時、同学科が地域教育サービスの一環として開催していた幼児教育の夏期ワークショップに参加した。私はそのグループでフルタイムで働く教員の一人だった」。



ビクタンの政治的勾留者。ネリアは右から7番目。（写真はフェイスブックより）

「ネリアや他の元政治囚たちは、両親がまだ拘束されていたり、釈放されたばかりだったり、外での生活を再開していたり、孤児として親戚に面倒を見られている政治的拘束者の子どもたちを支援するペアレンツ・オルタナティブ・インコーポレイテッド（PAI）を組織する初期段階にあった。私たちは彼らのためのデイケアセンターの設立に協力した」。

フェニーはフィリピン大学で教鞭を執る傍ら、PAI のボランティアとして「仕事後の仕事」をしていた。「近くで一緒に働く過程で、ネルと私はすぐに友達になった」。

ガブリエラ女性党の活動家リサ・マサも、PAI 経由でネリアと知り合った。「私は息子のためにデイケアを探していました。PAI が活動家の子どもたちを受け入れていると聞いたんです。当時、私は反独裁運動で活動していたので、デイケアが必要でした。また、ネリアが PAI を運営しており、自身も活動家であることを知っていたので、彼女なら私たちの懸念を理解してくれると確信していました。彼女は最終的に私をガブリエラに採用しました」。

「ビューティー・クイーンから活動家に転身した彼女の個人的な経歴は、すぐに私の尊敬を集めました」とリサは続ける。「彼女が華やかで特権的な道を選んでいれば、この社会で快適な生活を送ることは容易だったでしょう。ガブリエラで彼女と直接仕事をするなかで、私は彼女への称賛の念を深めました。なぜなら、彼女は実践的で、勤勉で、創造的で、貧しい人々に対する真の思いやりがあったからです。彼女は政治囚の女性や、人権侵害や性暴力の被害者にサービスを直接提供するさまざまなプログラムを立ち上げました。彼女はただ美しく魅力的な人ではなく、有能で熟練した女性リーダーでした」。



ネリアの通夜で話すニッキー・コステング元上院議員。リト・オカンポによる写真

元上院議員で街頭の国会議員ニッキー・コステングは、ジェマ・クルスがミス・インターナショナルのタイトルを獲得したとき、自分はやっと高校を卒業したところだったと振り返る。「彼女、マイタ、ネリアの3人は、脅迫や実際の拷問、物質的な快適さを奪われたとしても、信念と献身は弱まることはないことを示しました。実際、彼女たちは自分の信念を貫き、その代償を支払ったのです」。

ニッキーはネリアとの出会いを次のように語っている。「彼女との活動の大半はナショナリストの発言者が、歴史的事実とフィリピンの現状との関連性を語る場への参加だった。私たちはまた、街頭議会などの大衆行動にも参加しました。雨の中、あるいは炎天下の中、真昼の何キロもの距離を、時には4時間以上もかけて行進し、やっとの思いで集会会場にたどり着いたことを何度もあったことを思い出します。放水を浴び、オールで胸を殴られるような思いをしたこともありました！ ずぶ濡れになって気分が悪くなりましたが、家に帰るためにまた数時間歩かなければなりませんでした」。

ネリアは「決して疲れているようには見えませんでした。そして本当に、私たちは自分が疲れていることを認めたくありませんでした。たぶん、私たちにとって『疲れ』は感じるべきものではなかったのでしょうか」と彼女は振り返っている。

ニノチカは、ネリアが「特に私生活に関してはガードが堅い」と感じていた。「彼女はいつも自分の使命に集中していた。地下活動の経験のある人はたいていそんな感じだ。ただ、彼女がある時、結婚生活の困難について短く話したことがあった。オランダで、私がフィリピンの女性団体の代表を務めた会議で、私たちは一度衝突したことがある」。メアリージョンと同様、ニノチカも売春を合法化すべきだとは考えていなかった。「ネリアは会議の外で私に、私の立場は古臭いマルクス主義であり、フェミニストではないと言った。私はフェミニストの立場とは何かと尋ねた。彼女は、自分のセクシュアリティをしっかりとコントロールできる女性もおり、彼女たちは無力感を感じることなく、それを市場に出すことができる、と言った」。

ニノチカやメアリージョンと同様、リサも売春問題ではネリアと意見が合わなかった。「ガブリエラは、売春は女性に対する暴力の一形態であり、売春をする女性のほとんどは貧困に追い込まれ、家父長制による抑圧の犠牲者であるというのが、当時の私たちの立場であり、現在も維持していることなので、この点ではネリアと意見が合いませんでした。意見の不一致にもかかわらず、私たちは互いの意見を聞くことに前向きでした。この意見の違いは、女性運動の発展のために彼女が貢献してきた活動を否定するものではありません」。

フェニーとネリアはほとんどすべてにおいて意見が一致した。この教師は、「意見の食い違いがあったという記憶はない。まったくなかったと言っていい。互いを尊重する気持ちが常にあった。ネルは親として私にアドバイスを求めた。私はAKとアンナにとって彼女の村の一員だった。その後、彼女は孫のことで悩んだとき、私を頼ったこともあった」。

彼らの確固とした共通点は、子どもの権利の擁護であった。世界的な運動が本格化した80年代初頭、国連子どもの権利条約が起草され、1989年にはほぼすべての国連加盟国によって批准された。ネルは私に国際会議での講演や作業部会への参加を要請した。彼女は私を信頼し、私の学歴と進歩的な教育者としての経験から多くの貢献ができると主張した。私は彼女のことを、子どもの権利に関するグローバルNGOの世界における『人材スカウトマン』と呼んでいたと思う」。

無料法律支援グループのミラベル・クリストバル弁護士は、「ネリアはわたしが子どもの権利に取り組むきっかけをつくってくれたので、彼女と私は一般的な女性の権利擁護と子どもの権利について意見が一致しました。私たちは常識的な問題については同意していましたが、それ以外の問題については、彼女はいつも運動の優先事項やプログラムだと私か認識しているものに従っていると感じた。彼女はいくつかの事柄について自分の意見を持っていたが、たいていの場合、それを自分の胸にしまっておくか、親しい人たちだけに話し、すう勢的な意見に反対しなかった。彼女は「一線を守って」いた。私は「有名人」とみなされる人物がその公的な立場を利用して異なる立場を取ったり、時に調子を崩すのを見てきたので、私は当時、彼女の態度に感心した。

ニッキーは、1985年7月にケニアのナイロビで開催された「国連女性の10年会議」（フ

オーラム'85)のフィリピン代表となったとき、ネリアとより親密になった。「当時の私たちの課題は、米軍基地の存在、女性に対する暴力、政治囚の釈放、人権、リプロダクティブ・ヘルス、環境などでした。ネリアは付き合いやすく、非常に勤勉で規律正しかった。彼女はスケジュールに厳格で、世界中の女性団体に接触し、多くのネットワークをつくりました。彼女はスーツケースいっぱいのチラシや資料を持って、会場のあちこちに配ったり貼ったりしていました」。

彼女にとって、「ネリアはいつも思慮深く、メッセージを伝えるときも誇張することはありませんでした。嫌な相手に対しても礼儀正しかった。彼女はよく話を聞き、人の話を真剣に聞いていました。」

「友人として、彼女はいつも自分のことを最後に考えていました。大騒ぎすることもなく、気取ることもなく、自慢できることはたくさんあったのに、少しも傲慢ところがありませんでした。彼女は拷問者の中で死んでいたかもしれません！彼女は信じられないほど勇敢でした！いつもです！」。

元議員はさらに「ネリアは、すればできたのに決して要求することはありませんでした。リーダーとして、また多くの人々が尊敬するアイコンとして、すべては彼女から他の人々へのお願いでした。実際、私は彼女が声を荒らげたり、人に対して醜い発言をしたりするのを聞いたことはありません。私がそのような発言をしたとき、彼女は何とか私を落ち着かせ、私が自分の発言を後悔することもありました」と語っている。

ニッキーは、ネリアと過ごした時間を「学び、気づき、理解し、強化し、さらにその言葉を広めようと決意した時間」と考えている。「彼女には、私が決してできなかったであろうことを説明する方法がありました。彼女は自分が選んだ仕事にぴったりの女性でした。彼女は威厳と効果をもって素晴らしい仕事をしました。ネリアは必要最低限のことしかしませんでした。必要以上のことはしないということは私にとっては難しいことでした。何かそれ以上のものができれば、それはすべて「お祝いの理由」になりました。彼女は必ず心から感謝し、感謝の気持ちを伝えました。



ピンクの服を着た元気なネリア（アンナ・レア・サラビアによる写真の複写）

彼女は次のようにも語っている。ネリアの態度は「世界は彼女に何の借りもないというものでした。それは、まったく違う、もっと楽な道を選ぶこともできた人に見られる、とんでもなく稀有な資質です。彼女は自分が運動に貢献できたからといって、それ以上の価値がある人間だとは決して考えていませんでした。ストレス、苦難、不自由、批評家からの厳しい言葉にもかかわらず、ネリアは自分の立場を貫いたのです」。

シスター・メアリージョンは、イデオロギー的な傾向にもかかわらず、ネリアが信仰を持っていることを示す他の特質を見出した。「私は彼女に『宗教的な側面』を見ることはありませんでした。しかし、私は彼女が貧しい人たち、周縁化された人たち、虐げられた人たちに心を寄せ、逮捕され投獄されることもいとわず、その人たちのために私心なく行動する慈愛に満ちた女性であることを知っていました。彼女はまた、冷静さ、穏やかさ、優しさといったオーラを持っていました。社会問題や政治問題についての集会での彼女の熱弁を聞くまでは、誰も彼女が活動家だとは思わないでしょう。私にとって、これは宗教性とは異なるスピリチュアリティです」。

フェニーもネリアが深い信仰心を持っていることに気づいていた。「私は彼女の人生で最も困難な時期、幼児と乳児のシングル・ペアレントでありながら、家計を支えるために懸命に働いていた時期に彼女に出会いました。彼女は常に宗教セクターと非常に密接な関係にあった。PAI を始めとする私たちの活動において、彼女は常に勤勉で進歩的な修道女を採用していた。彼女は修道女たちと心から打ち解けていた。価値観や信条を共有していたからだ」。

彼女は、ネリアが「思慮深い友人であり、私のことを気遣ってくれる同志」であることに気づいていた。「彼女はいつも、私がうまくやっているかどうか尋ねてくれた。彼女は辛抱強く物事を説明し、模範を示して指導してくれた。彼女は何時間でも働き続けることができたが、一緒にくつろぐことも知っていた。彼女は温かく優しい人だった」。

ミラベルは記事や本を読んだり、女性リーダーの話の聞いたりして、まだ勉強中だった頃、ネリアのことをプロの活動家であり、女性の権利擁護者であると見ていた。「私が新参者だったので、彼女は時間を割いて私と話し、問題や議論を説明するだけでなく、政治グループや勢力間の力学や、私たちが一緒に出席するさまざまな国際的な場での異なる見解を共有してくれた」。

「ロラのさまざまな証言を詳細に記録する必要があり、私たちはさまざまな証言を入手し、検証し、吟味しましたが、彼女は慰安婦に接するときは、辛抱強く、注意深く耳を傾けながら、彼女たちの主張や話の矛盾点を慎重に見つけました」。

シスター・メアリージョンとネリアは12歳離れていたもので、「同世代のような友人というわけではありませんでした。しかし、私たちは互いに仲良く活動し、同じ情熱や、困窮し、搾取され、虐げられている人々への思いやりを分かち合うという意味では友人でした。そして私たちはお互いに正直で率直でした。ネリアの弱点のひとつは、個人的なものであれ組織的なものであれ、会合に遅刻することです。一度だけ、彼女が私たちの全国会議で大遅刻したとき、私が『修道院では遅刻したら全員の前にひざまずくのよ』と冗談を言ったことがあります。彼女はただ申し訳なさそうに微笑みました」。

「同志として、私はこれほど献身的で、これほど集中し、これほどたゆまぬ努力を続け、新しいプロジェクトを立ち上げる勇気を持った女性を見たことがありません。彼女が始めた重要な運動のひとつに慰安婦問題があります。韓国に行ったとき、彼女は、占領していた日本軍に拉致され、日本兵に性的に奉仕するために強制連行された女性たちの話を聞きました。フィリピンも日本に占領されていたのだから、フィリピンにもそのような女性がいるはずだと彼女は考えましたが、当時はまだまったく表面化していませんでした。そこで彼女はガブリエラの事務局長として、同じことを強要された女性たちにラジオで呼びかけました。彼女たちはその呼びかけに応えました。最初に応えたのはロラ・ロサ・ヘンソンでした。そうして、慰安婦たちが自尊心を取り戻し、サバイバーであるだけでなく、提言者にもなったリラ・フィリピーナが誕生したのです」。

ネリアの死の報に接して、ニノチカは言った。「カーテンがまた少し幕を降ろした、と私は衝撃を受けた。私たちは近く旅立つだろう。この列島の輝かしい時代、つまり社会変革運動の最初の数十年が終わる。そしていつものように、同じ質問がよぎる。アルフィー、あれは結局何だったんだろう？ 長く苦しい闘いで、世界を変えることはできなかったとしても、それは私たちを変えたのだ」。

ニッキーは「悲しく、ひどい」と感じた。「彼女のような人はもっと報われてしかるべきだし、ただ大義に生きて尽くした後にはたった一人で死ぬべきではありませんでした。私たちは何年もの間、まったく連絡をとっていませんでした。私はそれを後悔しています。そしてまた、彼女はそのような人だったのです。彼女は多くのことをあきらめ、人々がこの国にすべてを捧げ、最期は誰にも迷惑をかけたくないと思ったのでしょう。私は大きな喪失感を感じました。彼女を知り、彼女から学ぶことができたのは名誉なことであり、特権でした。それは当時の学校では決して学べなかつたらうし、今の学校でも学べるものとは思いません。今の若者たちには、私たちに降りかかった呪いを解くために、私たちの国のためにどのように別の道を切り拓くのかを経験する機会がなく、ネリアが亡くなったことは大きな損失だと私は感じました」。

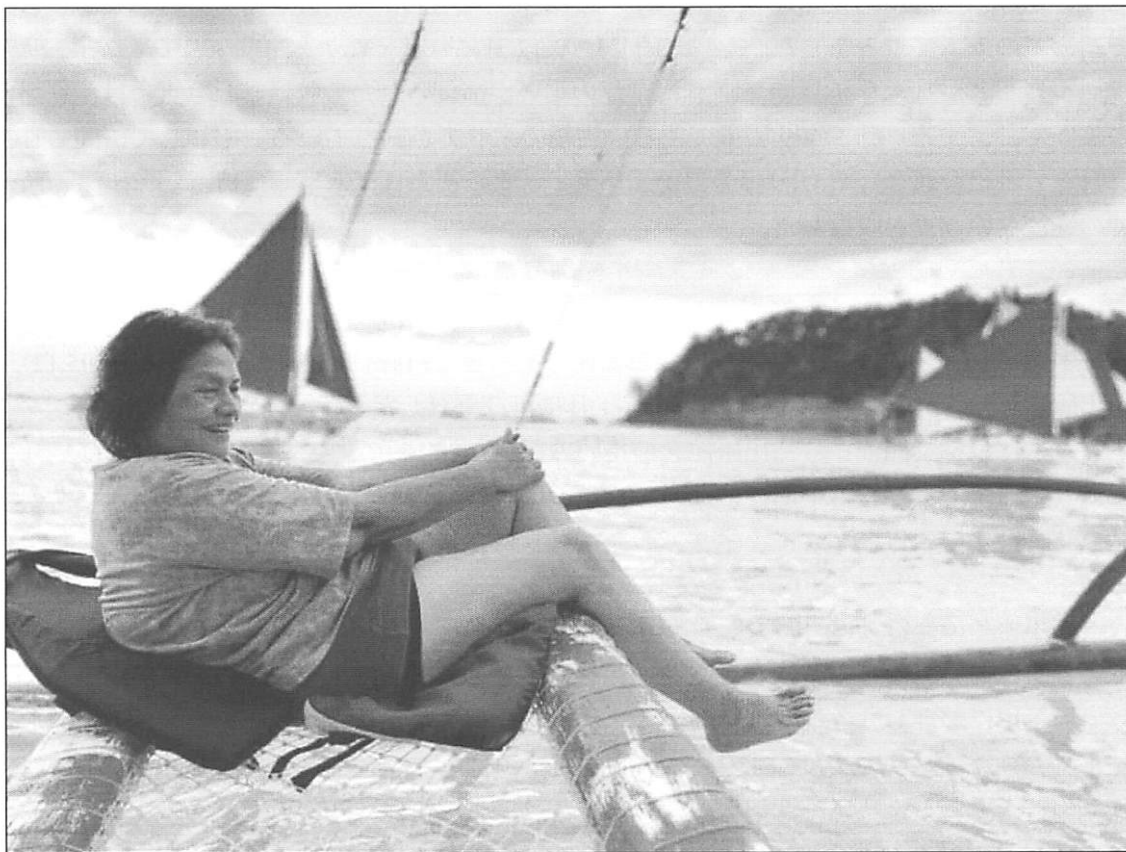
フェニーはネリアの71歳の誕生日にオンラインで挨拶したばかりだった。数日後、彼女は「ネリア・サンチョがブリスのアパートで亡くなっているのが発見された」というニュースを聞いてショックを受けた。「私はフィリピンの女性運動に多大な貢献をした、内面的にも外見的にも美しい人物を失ったことに悲しみを感じた。しかし、彼女が充実した人生、現代の若い女性たちにインスピレーションを与えることのできる有意義な人生を送ったことを私は知っている」。

リサもショックを受けていた。「彼女が長く糖尿病と闘っていたことは知っていましたが、あまりにも突然の死でした。彼女はまだまだ貢献できることがたくさんありましたが、彼女はもう私たちとは一緒にはいません。彼女の人生の物語が、ゴシップとしてではなく、真の美しさ、勇気、他者への奉仕の『物語』として、世代を超えて受け継がれていくことを願っています」。

ミラベルも同じように「誕生日の翌日に孤独死したことを知って、悲しみ、動揺した。彼女が糖尿病を患っていたこと、病気だったこと、カティクランに引退していたこと、しかしマニラに時々来ていたことは知っていた。結核を患って以来、家族と一緒に暮らした

がらなかったということによって彼女が一人でいたことに私は混乱した。結核は治る病気であり、健康な人が自動的に結核になることはない。友人や同志たちは、結核になっても一人で暮らす必要はないことを誰も説明しなかった。彼女がひとりぼっちだったのは本当におかしなことだった。運動や左派からアイコンとして扱われてきた人物が孤独に死んでいったことに私は憤りを感じた」。

それでもフェニーは、ネリアが深い遺産を残したと感じている。「彼女の貢献は計り知れない。彼女はたゆまぬ努力を惜しまず、さまざまな面で新境地を切り開いた。彼女は人々を本当にうまく動員し、組織したと思う。それは彼女の貢献の大きさを倍増させている。彼女は、人生のさまざまな部分から人々を集め、うまく協力させることができた」。



リラックス（ネリアのフェイスブックのプロフィール写真より）

（翻訳：池田高巖、藤目ゆき）